

●菩提寺の庭はそれぞれ紅葉もみぢどきさくらもみぢと区の保護樹林

河村郁子

深閑寺が菩提寺の名か。一連タイトルは「深閑寺庭 もみぢどき」。

それぞれ、は桜（の部分）と区の保護樹林としてるところ、ということか。いずれももみぢどきなのだ。そこに来ている。場所をあきらかにする始めの歌。区の、とあるので、寺のありかは東京都区内ということもされる。

名木と指定される公孫樹こうそんじゆ34メートルを樹下より見上ぐ

ルビをいちやうとした歌もあるが、この歌ではルビをこうそんじゆとしている。少し改まって距離が置かれた感じ。音数の関係もある。イチヨウ科唯一の落葉高木。普段は下を向いて歩いているようなところか、こんな風に見上げることにはある。頼みになるような高さ、また、（寄りかかってしまう）図太き幹（四首目）。

いろいろ気持ちや感觸の交歓があることになる菩提寺の庭。なかにこの歌、下句独特。

散り敷くるいちやう落ち葉を踏みゆくに足裏あなうらに淡き触れ合ひ覚ゆ

●月山の白と懸巢かけすの白映えて

新野祐子

月山、懸巢かけすいずれもパーツが白か。見重ねているところ。月山をみたことはないが、夏でも雪溪がのこっていることでしられる。ここでは秋の山のひとつ。遠景と近景でもある。映えて、の意味は目立って、引立って、際立って。

秋の日の生んだ彩雲より羽音

秋の日の、で提題し、彩雲より羽音で視覚から聴覚にもってくる運動感。それも遠くから。

清太岩山せいたいわは天狗の名だろう天高し

より近くの（あるいは足下の）山か、清太岩山せいたいわは。検索すると清太岩山（朝日連峰）と出てくるものがある。やや親しい呼び名（方）。天狗の名だろう、には説明がないが、清太がいかに人の名であるところからか。調子のよさがある。

土を踏んでいる感覚も確か。山行のその刻々の空気感、そこに一連の魅力がある。

●ぼんぼんと上がる湯気なり中華粥その勢ひやよし寒き朝に

布宮慈子

一連タイトル「中華粥」。これで検索するとこれでもかというくらいにレシピを多くみる。一連では、おおよそレシピ通り、といっている手順で歌がならぶ。みな手がうごいていて、歌に勢いがある。また引用の歌、三首目からも、朝食にしていることがしれる。

沸騰した湯に米から、粘りなき粥、土鍋、手羽元を水から煮出してスープにする、ニンニク胡麻油が入る、仕上がりが米の花、薬味にザーサイ、枸杞の実。そして蓮根、は別途蓮根粥というそのヴァリエーションの一つか（十首目）。

作る楽しみ、は手間の楽しみでもある。最終歌は、名称としてならんだ粥。

家事の一部だが、食事は活動になっていて、それがここでは中華粥。いずれにも心弾みがある。

小豆粥、芋粥、蓮根粥、白粥さへもわんわんと炊く

前号作品短評B 〈慈子〉

●コバトンが仲良くしているところなれば歩いて川をきれいに

小野澤繁雄

「コバトン」とは何かと思つて調べてみると、埼玉県のマスコットだった。平成十六年（二〇〇四）に開催の第59回国民体育大会に向けたマスコットイメージを募集した結果、選ばれたもの。「シラコバト」と「バトン」で「コバトン」と命名したとのことである。歌の意味は、埼玉のマスコット・コバトンが仲良くしている場所なのだろう、並んで歩いて川をきれいに。語尾が省略されているのでわからないが、このような標語とイメージの看板があったとも解釈できる。いずれにしても、コバトンという地元のマスコット名を敢えて用いて、インパクトを与えている歌である。

人生の余白のようなみちにでてスキ伸び秋なれば秋風

「人生の余白のようなみち」で、大方は表されているのではないか。「伸び」は文語調であり、いったんここで切れるが、全体の音数を整えるために必要だったのだろう。

●晩秋の風に吹かれてほつほつとわくらば落ちる並木路をゆく

市川茂子

秋の終わりの風に吹かれながら、枯れて変色した葉が少しずつ落ちてくる並木道を行く、という。おそらくは一人であり、心象風景ともいえるものだ。

夕暮れのあわき陽ざしにあきつ飛ぶ心静かな一日の終り

路地を来て曲がるこの角扉ごしにハゼの実赤く小春日に映ゆ

解釈するのに難しいところはない。「あきつ」はトンボのこと。一日の終わりに出会う風景は穏やかであり、作者自身の心の持ちようが反映していると見るべきであろう。あとの歌は、路地の曲がり角の扉から見えるハゼの実が赤く、暖かな秋の季節に映えている様子をいう。あきつが赤トンボとすれば、いずれも赤であるから、ほっと温かさを感じるのである。

●衣類の脱ぎ着洗顔整髪ままならず身は一夜にて棒のごとくに

梅津純子

「棒のごとくに」と題する一連は、身体が棒のようになってしまったことを嘆き、その顛末を記す。

何といふわが身の重さ足立たねば摺まり立たむに手に力無し

肩痛み風呂をわかつて夜の更けに温まむとせしことの幾たび

急激な体の変化に戸惑いながらも、なんとかしようとする作者はもがく。

激痛に一睡もせぬ肩に打つステロイド注射麻薬のごと効く

種々の検査に該当無き故確定すりウマチ性多発筋痛症と

いろいろな検査をしたけれども、どれにも当てはまらないので、この病名に決まったのだという。ステロイドは強い薬と思うが、痛みを緩和するためには仕方がないのだろう。早く回復することを願うのみ。

●まず衣装次に発声・ハーモニー三年ぶりのステージが来る

大橋千佳子

コロナ禍で開催できなかった期間があり、三年ぶりに催される行事とのことだ。衣装と発声等とあるから合唱なのだろう。一連の題は「制限も緩和されつつ」であるが、マスクはまだ付けたままだ。

Nコンの子らのマスクは皮膚の一部何事もなく上げては歌う

やめ時の踏ん切りつかず来客にかざす非接触体温計

「Nコン」は、NHK全国学校音楽コンクールのこと。生徒たちは大人の心配をよそに、マスクが皮膚の一部のように扱っている。いよいよステージが始まる。いまや馴染みとなった接触せずに測れる体温計を来客に向けながら、いつまで測ればいいのかとの疑問をもつ。表舞台の生徒のさりげない表情と、大人の内心の揺れとが交錯する歌が多かった。